

[あとかぎ]

私的な表現のコラージュ

中村 この本は図像と言葉のコラージュでできています。

宮本 僕にとっては初めての表現方法です。

中村 東京の神保町にある喫茶店「ミロンガ」で宮本さんと話していた時にポロっと出てきたアイデアでした。

宮本 そう。タンゴの音楽が流れていました。コーヒを飲みながら、中村さんが「マーシャル・マクルーハンの『メディアはマッサージである』のようなコラージュで本を作ってみよう」と不意に呟いたのが、この本の出発点です。

中村 「コラージュ」というのは、もともとはそれぞれに違った意味をもっていた素材を切り貼りして、その総体をもって新しい意味を表現するというので、絵画技法の一つです。これまでの年月で僕たちそれぞれの中に認知運動療法の意味が形をなしてきた様子は、このコラージュによる意味作用にとても似ていると思います。ヘルフェッティ先生が教えてくれたことと、仕事も含めて自分が経験してきたいろいろなこととが、ある時からいろいろと重なり始めて新しい意味をもってきたからです。一見別のこととして捉えていたことが実は同じものを違った方向から見ていただけだったとか、それはもっと次の意味に繋がっていたとか…そんな経験が多くなってきたわけです。

宮本 認知運動療法を理解しようとする時、理論－病態解釈－道具－訓練の総体を理解する必要があります。でもそれを一挙に理解することは困難ですし、これらを単純に足せばその総体の全貌が見えてくるわけでもない。理論とは、病態解釈とは、道具とは、訓練とは、といったように一つ一つの要素を深く勉強し、それらをつなぎ合わせて臨床実践できるようにならなければなりません。それもまた、複数の未知の要素をコラージュしながら、最終的に全体として何が表現されているかを見ることができるようになることに似ています。また、何かが見えたとしても、その意味が見えないこともあります。さらに、臨床実践して、その意味に新しい価値を付与する必要もあります。認知運動療法は、総体としては患者さんが回復へと向かう学習プロセスとして構築されているのですが、同時にこの治療の本質は、セラピストの思考の中で生まれる学習プロセスでもあります。

中村 そこがコラージュとパズルの違いかもしれませんね。パズルの場合、完成すればその全体像のはっきりと見えるし、パズルのピースの総計はその全体像とイコールです。ところがコラージュでは、いくつもの要素を選択し組み合わせることによって何かの意味を発見しようとする試みの連続であって、要素やその組み合わせ方によってそれが示唆する意味は常に変化していくことになります。つまりパズルには完成と作業の終わりがあるけれど、コラージュには自分たちの思考に応じて変化がある、成長があるということになります。

宮本 自分の経験で言うと、僕はサントルソ認知神経リハビリテーションセンター

で長期研修したのですが、最初の数か月はセラピストの隣で認知運動療法を毎日見学していました。治療場面は見えますが、セラピストの思考は見えません。そこでセラピストが何を考えながら治療しているかを想像し続けました。治療の中に潜んでいる理論—病態解釈—道具—訓練の意味を探すわけです。その意味は治療の中に複数の断片の総体としてあります。つまり、この心的作業は他者の思考を推理し、自分の思考と比較することです。これが思考の学習プロセスを強化します。思考の学習プロセスとは、断片的な複数の知識をコラージュし、知識と知識の関係性の網を複雑化させてゆくことです。それによって、一つの現象を複数の視点から見られるようになり、これまでとは異なる新しい意味を付与することができるようになります。この本の表現方法は、言ってみれば図像と言葉の「コラージュ」ですが、読者に対して自分の思考と著者の思考とを比較してみることを要求していると言えるのではないのでしょうか。あなたにはこれらが単なる断片に見えますか、それとも何かここにはないものに見えますか、それに新しい意味を付与して下さいと求めているのです。この本をどう読むかは読者の心的な作業に託されているのです。

中村 そのためには僕たちも、これまでのような「本を書く」という先入観から離れる必要があると思ったわけです。書いてある文章だけではなく、図像や言葉の間にある意味を読んでもらうというのは「書く」ということとはかなり違います。意味概念を説明する理論的なテキストではなく、むしろ自分の頭に浮かぶいろいろな心象、それは映像イメージだったり言葉のフレーズだったり、あるいはそれに伴っている感情だったり、つまり誰からしてもほぼ同じ意味に限定されているような一般的な表現ではなく、とても自分の経験に密着した、私的な表現を選んだわけです。適当にシェーマも使いながらテキストで理路整然と説明したほうがはるかにわかりやすいはずなのに、なぜこんな断片の配列という手法を選んだのかと思う人もいるかもしれません。その理由を僕なりに言うと、ものごとを理解することは、それが自分にとって重要なものであればあるだけ、それはとても個人的なことではないのかと思うからです。毎日暮らしていくうえでとりあえずはそっこのほうを見なくても済ませられるというものではなくということですね。自分が今向き合っていることは自分を超えた、人間性全般に関わるとても普遍的なことなのだけれど、それに対する自分の向き合い方は逆にとても個人的なイメージや言葉で表現するほうが、かえってその理解を自分の内面に落とし込んでいけるのではないかと思ったからです。自分の目線でそれがどう見えるのか、そこにどんな自分の思念や感情がわいてくるのが表現の目的となります。この本のテーマは「認知運動療法」なのですが、このテーマが僕にそうした個人的な関わり方を要求するのです。このテーマに関わる限り、自分には理路整然とした説明以上の理解を

求められている、敢えて言えば「共感する」こと、認知運動療法について言われることについてはたして自分の心の中にそれに共感するものがあるのかどうかを問われている、あるのであればそれを意識することが求められているような気がしています。少なくとも僕については、ということですけど。

宮本 わかりますよ。その「個人的な関わり方」ということと言えば、究極的にすべての医学的治療、リハビリテーション治療は個人が行うものだと思います。医学が、あるいは理学療法、作業療法、言語聴覚療法が患者さんを治療するというより、あくまでも臨床実践は一人のセラピストが行うものだと思います。そのことへの強い自覚をもっていないと、回復させることができなかつたのは医学の限界だ、理学療法の、作業療法の、〇〇法の、認知運動療法の限界だと解釈してしまいます。それはある意味で責任放棄です。回復させることができなかつたのは個人の思考力や技術の問題に起因していたかもしれないのですからね。いつも僕は「認知運動療法」の理解を個人の問題として捉えています。そして、これは一種の闘いでもあります。「理解する」ということに対する闘いです。その闘いに終わりはありません。認知運動療法によってすべての患者さんが完全に回復するわけではないからです。ですから、理解すると同時に理解できない点に意識を向け、学問的、臨床的な苦悩を続ける必要があります。そうすることによって自分自身の知識や経験がある前提に立っていたことに気づくことができます。その前提の誤りに気づくことが「理解する」ということです。ペイトソンは「前提が間違っていることがあり得るのだ」という観念を一切欠いた人間は、ノウハウしか学ぶことができない」と述べていますが、認知運動療法はノウハウだけではないのです。

中村 まだまだ説明できない、理解できないことのほうが多い世界ですからね。

宮本 そう。だからこれは僕たちの職業的態度の問題でもあるのですが、言い換えれば僕たちの職業がもつ魅力ということでもあるわけです。何かを理解するためには説明と同時に、あるいは説明以上に「驚き」や「発想力」が必要です。ペルフェッティ先生は「リハビリテーションは驚きから始まる」とか「認知神経リハビリテーションの特徴は発想力にある」と言っています。この「驚く」ための感性やアイデアを生み出す発想力がなければ「新しい理解」には至りません。そして、これこそが「理解すること以上のことを求められている」ということだと思います。この本では、中村さんや僕がペルフェッティ先生のフレーズに個人的に驚いたり、さまざまな写真や図像から想像力が喚起されたものを、一連のコラージュとして構成しています。そこには「認知とは何か」、そして「認知運動療法から行為間比較へ」という文脈は一応ありますが、それを説明したいと言うより、それ以上に僕らの驚きや感動が読者の驚きや発想力をも誘い出して欲しいのです。「こんなことに感動しました」と説明するのではなくて、感動したテキストと画像との組み合わせ

自らを改変することが、
認知の目的だ。

カルロ・ペルフェッティ(2012年)

